

「知っていること」の功罪

舞台の幕開けと同時に、聞き覚えのある音が流れてきた。西町のスクランブル交差点の…歩行者信号が青に変わって…あっ、誘導音か。そこにガタンゴトンと、市内電車の走行音がかぶさる。まだ照明は薄暗いのに、頭の中ではなじみのある光景が鮮明に浮かび上がる。せりふは一言も発せられていない。いやそもそも何も始まっていないうちに、物語の世界に瞬時に引きずり込まれた。理屈ではない。富山で生まれ育った者にしか分からない、記憶に深く刻まれた「音」がそうさせたのだ。

本作は富山市出身の劇作家、タニノクロウが主宰する「庭劇団ペニノ」の代表作。舞台は寂れた定食屋。偏屈なマスターの提案で、代わりに厨房に立つことになった青年。次第に同化する2人。そこに青年の恋人や地上げ屋が絡み、物語は思わぬ方向へ…。今回の公演に合わせ、タニノは脚本を全面的に書き直したという。

もちろん富山が舞台になっていることを知った上での鑑賞だ。テレビには地元のニュース。せりふは富山弁。至る所に「富山」がちりばめられている。それでも冒頭の「音」の演出がなければ、これほどの一体感は味わえなかったかもしれない。物語自体の面白さと相まって、片時も目が離せなかった。

ただ、その一体感は終盤にかけて失われていった。なぜだろうか。定食屋を繁盛させることで、まちなかに再びにぎわいを取り戻そうと執念を燃やすマスター。あくまで物語を進めていく上で設定にすぎないのだろうが、果たしてそんな気概のある店主が、シャッター通りと化した富山の中心商店街に実在するのだろうか。現実を知る地元民として、そこにリアルさが感じられなかった時、夢から覚めた気がした。

タニノと筆者は同世代。商店街が人でごったがえしていた記憶を共有する。ただ、大学の4年間を除き、富山で暮らしてきた筆者と、富山以外での生活が長いであろうタニノとは、商店街に現状に対する認識にずれがあるのかもしれない。富山をよく知っているからこそ楽しめた舞台。そして、知っているからこそ違和感を覚えた舞台。富山の人間でなければ、この舞台、どう鑑賞したのだろうか。

R. 0 (富山県富山市)